

## 主論文要旨

### 題目 南琉球宮古語史

氏名 <sup>セリック ケナン</sup>  
CELIK Kenan

本論文は、沖縄県宮古諸島で伝統的に話され、日琉語族の南琉球語派に属する宮古語を対象とし、先行研究のデータに加えて論者自身による現地調査によって得られたデータに基づき、歴史比較言語学の方法を用いて、その言語の歴史の一部を明らかにするものとする。本論文は全5章からなる。第1章では、本論文の対象、目的および方法について述べ、研究対象となる宮古語に関する基本的な情報を記す。第2章では、分岐学の手法を用い、南琉球および宮古諸方言の系統関係を扱う。第3章では論者の調査結果を元に、宮古語の3つの方言(多良間仲筋、水納島、下地皆愛)のアクセント体系を記述しながら、宮古語の韻律構造について考察を行う。第4章では、宮古諸方言の比較データに基づき、宮古祖語の動詞形態論を再建し、第5章では、本論文で明らかになった結果を要約し、残された研究課題について述べる。

第1章では、本論文の対象、目的および方法について述べた後、宮古語に関する基本的な情報を記す。本論文の対象は沖縄県宮古諸島で伝統的に話される宮古語である。この言語は日琉語族の南琉球語派に属し、集落を単位とする約40種類の方言からなる。宮古語の全ての方言が同じ宮古祖語に遡ると仮定されているが、現在に至っては方言間の差が著しく、宮古諸島は非常に多様な言語空間をなしていると言える。このため、厳密な比較方法を用いれば、歴史文献のほとんどない宮古語でもその歴史を正確に明かすことが可能である。その中で、本論文では次に述べる目的を掲げながら、特に3つの事象、すなわち、「系統分類」、「アクセント体系」、「動詞形態論」を取り上げ、論じる。第一に、分岐学の手法を用いて、宮古諸方言および南琉球諸方言の大量のデータに基づき、宮古語の系統的位置、または、宮古諸方言の系統関係を明らかにする。第二に、論者の調査結果を元に多良間仲筋、水納、皆愛の3つの方言を取り上げ、そのアクセント体系を詳しく記述し、先行研究の結果を踏まえながら、それらの方言の韻律構造について考察を行う。第三に、歴史比較言語学の方法を用い、宮古祖語の動詞形態論の再建を試みる。

第2章では、分岐学の手法を用いて宮古語の系統的位置および宮古諸方言の系統関係を扱う。系統関係を明らかにするために、すなわちどの方言とどの方言が同じ祖語に遡り、同じ祖語から分岐してきたのかを明らかにするために、それらの方言が共有している改新(共有派生形質)を見出す必要がある。しかし、規則的な音韻変化など生起確率の高い改新は諸方言が分岐した後に並行的に起こりうるため、分岐学では、並行的に起こりにくい、生起確率の低い改新にだけ着目し、それらを系統関係の根拠とする。なぜならば、2つの方言が生起確

率の低い改新を共有している場合、その改新が同じ祖語から継承されたと考えなければ、両方言に分布することが説明できないからである。南琉球や宮古諸方言の系統関係については、これまで多くの先行研究が蓄積され、系統関係の根拠となる数多くの共有の改新が提案されてきた。本章では、論者の調査結果を含む八重山諸方言と宮古諸方言の大量の比較データを用いて、先行研究で提案されてきた共有の改新の妥当性を吟味し、新しい改新を提案した。結果、先行研究で提案されてきた大きな系統群、すなわち「宮古語群」、多良間諸方言を除いた「共通宮古語群」と「伊良部・池間語群」が妥当で、それらの語群を支持する根拠も多いことが確認できた。しかし、より細かい系統関係については、先行研究で提示されてきた改新の幾つかが適切でないことを論じた上で、これまで注目されてこなかった共有の改新を追加し、先行研究とは異なる系統関係を示した。

第3章では、宮古祖語のアクセント体系の再建に向けた前段階として、宮古語の3つの方言(多良間仲筋、水納島、皆愛)を取り上げ、そのアクセント体系について論者の調査結果を報告し、分析を行った。

第一に、3種類のアクセント型(a型、b型、c型)を区別する多良間仲筋方言の動詞と形容詞のアクセント体系を対象とし、活用形ごとの音調と韻律構造を明らかにした。その結果、c型とされてきた動詞は活用形によりアクセント型の交替が認められることが分かった。つまり、多良間方言の非a型動詞について、c型の名詞に準じる活用形(否定形、接続系、理由形、2類動詞の連体形等々)とb型の名詞に準じる活用形(複合語語幹、過去形、未来形、1類動詞の連体形)を想定する必要がある。また、韻律語を形成しないとされてきた接辞の中に韻律語を形成する接辞があることも示し、その結果を元に韻律語の新しい定義を提案した。次に、多良間方言の形容詞については、3種類のアクセント型(a型、b型、c型)が区別されることを明らかにした上で、叙述的用法に使われる「サアリ構文」が2つの韻律句(1つのアクセント型が実現する単位)を形成することを示した。なお、形容詞の「サアリ構文」の音調を正しく記述するために、補助動詞が先行するさ副詞形に融合する「融合形」と融合しない「非融合形」の区別を導入する必要があることを示した。最後に、動詞と形容詞の連体形と被修飾先の名詞の音調を詳細に調べ、連体節と被修飾名詞が構成する「連体構造体」において、被修飾名詞が含まれる韻律語の末尾拍に低核が付与されることを示した。これは、先行研究で提案された修飾と被修飾要素から構成される「メジャー句」という韻律範疇を支持する結果となった。

第二に、現地調査の結果を元に、多良間方言に系統的に近い水納島の名詞と形容詞のアクセント体系を対象とし、この方言のアクセント体系が多良間方言と非常に近いことを明らかにした。すなわち、水納方言では多良間方言と同様に、3種類のアクセント型(a型、b型、c型)が区別され、それぞれのアクセント型の実現を正しく記述するために多良間方言と同定義の「韻律語」を導入する必要があることが分かった。のみならず、水納島のアクセント型の実現が多良間方言と同じ特徴を示しており、多良間方言のアクセント体系について提案されている「欠性的低音調」の分析が水納島方言にも適用できることが確認できた。この結果は約250

年前に話されていたと仮定される多良間と水納の祖語において「欠性的低音調」のシステムがすでに確立していたことを強く示唆している。

第三に、宮古島本島で話される下地皆愛方言の名詞アクセント体系について、初歩的な調査結果を報告した。この方言における単純名詞は 2 種類のアクセント型が区別されることを示した上で、それぞれのアクセント型の所属語彙を調べ、琉球祖語の A 系列と B 系列の語彙が同じアクセント型に属し、C 系列の語彙とは区別される傾向があることを示した。これに対して、2 つの単純名詞から構成された複合語の前部要素の位置に A 系列や B 系列の名詞が立つと、それぞれ異なる音調が観察されることを確認し、複合語の中に A 系列対応型と B 系列対応型の対立が保持されていることを示した。特に、3 拍名詞を前部要素とする複合語は琉球祖語の系列に従って 3 種類の音調が実現している。つまり、皆愛方言は複合語という環境では 3 型のアクセント体系を保持している可能性があると考えられる。

第 4 章では、歴史比較言語学の手法を用いて、宮古諸方言における動詞の共時的なバリエーションに着目し、宮古祖語における動詞形態論の再建と現在の方言にいたるまでの変遷のシナリオを提案した。特に、宮古諸方言の共時体系において想定される拡張語幹の歴史的な出自と、動詞に関わる接辞の由来と成立について考察を行った。

第一に、現代の宮古諸方言の動詞形態論で想定される拡張語幹は主に宮古祖語の 4 つの形式、すなわち、「連用形」(過去接辞 \*-tar- が付く形式)、「連体形」、「已然形」(理由接辞 \*-ba が付く)と「未然形」(否定接辞 \*-nu が付く形式)に由来することを想定した上で、1 つの方言の共時体系において同じ拡張語幹として分析できる形式が、通時的に見て複数の形式に由来することを示した。のみならず、それぞれの方言で想定される拡張語幹の歴史的な出自が方言ごとに異なることも指摘した。なお、逆の現象、つまり、同一の形式に由来しながら、機能によって分岐した拡張語幹が存在することも示した(皆愛方言において「理由」と「確定条件」の機能に従って分岐した已然形はその例)。

第二に、動詞に関わる幾つかの接辞の由来やその歴史的な成立について考察を行った。その中でまず、宮古諸方言に広く見られる意志形の接辞 -di を取り上げ、諸方言の詳細な比較を経た結果、宮古の多くの方言で否定接辞と同じ語幹に付く意志接辞 -di は、本来未然形ではなく、勧誘形に付いていたことを示した。次に、意志否定形に着目し、多良間方言の意志否定形を根拠に勧誘形が本来、m 語尾を含んでいたことを示し、様々な方言に分布する反語形(-mma / -mba)が勧誘形の古い形、つまり、m 語尾が付いた形式にさらに -ba が付いた形式に由来することを論じた。これらの結果を元に、宮古祖語における m 語尾は 2 つの異なる語幹に付いていた可能性について述べた。

第 5 章では、本論文で明らかになった結果を要約し、残された研究課題について述べた。残された主要な研究課題として、主に形態的な形式に基づいて再建した宮古祖語の動詞体系と現代の方言における動詞の各形式のアクセントの整合性を計ることが挙げられる。このため、多良間方言以外の方言(B 系列対応型と C 系列対応型の区別を保持している八重山の方言も含めて)についてその動詞のアクセント体系を明らかにすることが宮古祖語および

先島祖語の動詞を再建する上では、最優先とすべき研究課題である。